

高校時代の思い出

山城15回 釜 本 邦 茂

私のサッカー人生は良き師のアドバイスにより小学四年生の時に始まった。然し本当の意味での始まりは、中学迄でサッカーも卒業させ、私を弁護士にと考えていた頑固な父を不承不承納得させ、高校サッカー日本一の座にあつた山城高校に入學した時だったと思う。

あの狭いグラウンドで複数のクラブが入り乱れて活動している様子を初めて目にした時、こんな状態でどうやって日本一になったのかと驚いたものであるが、郷に入つては郷に従えで、とにかくハードな練習が待ち受けていた。毎日グラウンドの周囲を二十〜三十周と走らされ、更に御室山中の石ころと石段の山道を石ころを避けながら、左に右に体を振り、フエイントの練習を取り入れながら上り下りを走り抜く。一年生に課せられた基礎体力作りとグラウンドの狭さ故にボールを蹴ること止めることにかかなりの時間を費やすことができた基礎練習は、森コーチに

よって徹底され、その厳しさは私たちが鍛えられれば鍛えられる程、ほくそ笑みながら増していったように思える。その夏の網野高校での合宿練習はそれを証すかの如く、熱い砂のグラウンドと炎天下で汗も涸れ、目の前が真っ白になるまでしごかれていた。丁度陣中見舞いに来られていた村山先生が、休憩時間に氷入りのジュースを振る舞って下さり「ジュースだー！」天の声に私たちは脱兎の如くかけ寄ったのだが、同時に「練習で走れんでジュースなら走れるのか。もう一度グラウンド走ってこいー！」森コーチの怒声が襲いかかった。再び走ったかどうかは覚えていないが、ジュースの冷たさは鮮明に記憶に残っている。

ハードな練習はその後の各大会に於いて優勝という成果を遂げ、「向かうところ敵なし」と云ってもいい程に山城サッカーは成長。そのお蔭で、私自身は一年生で我が校で唯一ユース代表に選出されたのだが、「サッカー部の方針として一年生の参加は辞退する。」村山先生の一言で夢の代表・海外遠征は幻となったのである。一年生からの選出は杉山氏以来二人目という名誉もあり、家に帰った私は悔しさのピークに達していたのだが、それが村山先生のご好意であることを父から知らされた。ユース代表は私にとっては思いがけない喜びだったが、そこには二十万円近くの自己負担という負荷があり、サラリーマンだ

った父にとって当時の突然のその費用は大きく、どうしたものかと事前に村山先生に相談していたのだ。父が全てを言葉にする前に先生は父の意を理解し、「部の方針での辞退」ということにして下さったのだった。事の真相を明かし、私を説得する父と自分を悪者に仕立て、真相を私に知らせないように納得させようと配慮下さった先生の思いやりに、私の心は落ち着きを取り戻し、来年のユース代表を目指すことに気持ちを切り替える事が出来たのである。

二年生になって間もない頃、村山先生、森コーチ、藤田京都サッカー協会々長のお力添えで、日本代表チームの指導に来日していたクラマー氏の強化合宿に二村、長岡、私の三名が特別参加させて頂く事になった。私は初めて接した本場のサッカーに、力強さ、瞬間的な判断のおもしろさ、点を取る醍醐味と、途轍もない大きな刺激を与えられ、クラマー氏の実技・教えに魅せられて、もつと強くもつと一級品にもつともつと……という思いに駆られた。わずか一週間、その後もクラマー氏の指導を受ける機会は訪れたのだが、「あの一週間がなければ現在の私はなかったかも知れない」と今でも思える貴重な時間を与えて下さった師たちに、「心から感謝の意を表するばかりである。

晴れてユース代表に参加でき、外国勢の強さ速さを身をもって知る事もできた。しかし、過去七年に亘り京都代表になつて

いた国体予選決勝で、主将であった自らがゴールを外してしまい敗退するという苦汁も味わった。

私の高校時代は、すばらしい師に支えられ、恵まれた事で、校内外に於いて様々な経験と次へとつながる闘志を沸き立たせ、私に揺るぎないサッカーへの道を決意させてくれた大切な三年間であったと、この記念誌の原稿のペンを取り、改めて感じている。

